
東方死神記

omegazero

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方死神記

【NZコード】

N6745V

【作者名】

omegazer0

【あらすじ】

ソレは眠っている。誰かに必要とされるまで……

タイトルにちょっと追加した模様

第1話 開演のベルが鳴り響く……（前書き）

はい！やつひやつた（笑）

まあこっちも更新していくます

駄文のセカイにようこそー！歓迎しますーーー

それではどうぞ～

第1話 開演のベルが鳴り響く……

そこにソレはいた

ソレは黄、人であった

ソレは人の姿をしていた。否、人の姿に似せていました
体は人ではなくとも、心は人でありたい

そう願っていた

ソレはある戦いの後、傷を癒やそうと眠りについた。
深い深い
眠りに……

ソレは眠っている間に自分の次元から消えた。

ソレが消えたセカイでは皆が大騒ぎになつた。しかし、時が経つにつれてソレの存在を忘れていった

ソレは眠る。必要とされるまで。守るべき者が現れるまで

リガ ツムガ렐
東方死神記
アラタナ モノガタ

第1話 開演のベルが鳴り響く……（後書き）

はやめ更新がんばります

第2話 天才が動き出す……（前書き）

とくになにもないけれど……東方紅魔郷レミリアに勝てない……さ
すがおせいさま

あの弾幕がかわせないいいいいいいいい。……咲夜さんでピチュ
リまくつてるからですね

第2話 天才が動き出す……

この世界に人が生息してから時間が過ぎた。人は知識を学び、どんどん賢くなつていった

「……縄文時代から急に近未来都市くらいになるまで

その近未来都市では、テレビがあり、空気の力で飛ぶ車があつたり。もつす」かつた

その都市では今、ある噂で持ちきりになつていた

「なあ、森の中の守護者つて噂知つてるか?」 「知つてる知つてる! 森のひときわ大きな大木のところにいるつて言うアレでしょ?」 「あ、俺も聞いたことある! でもあそこは危険な妖怪が沢山いて近づけないんでしょう?」 「そう。でもね……どうやらさまたが、特殊訓練をうけたエリート部隊を引き連れて確認するらしいよ?」 「特殊部隊!? それって妖怪を一発で消滅させるプラズマガンを装備しているつて……あれ?」

などと、都市の市民はみな『森の守護者』といふ噂をしていた。な

ゼ森の守護者なのがというと、守護者がいるとされている大木……樹齢1500年は超えていると思われる木、そのまわりは妖怪が暴れたり、自然を破壊したりといった行動をとらず、種族が異なる妖怪たちでもそこでは問題を起こさない為、その木には守護者がいるのではないか……という考えがでたからだ。

しかし、都市の科学力を生かした監視用の飛行ユニット（無人）で近づこうとすると、なぜか通信不能になり反応が消えるため、確認が取れないといた

しかし今回、都市の重要人物である……………がエリート部隊を連れて観察に行く、と発表した。これがさらに噂を広めたのだ

場所がかわり……………

とある家、その家だけ他の家とは違った雰囲気をしていた。でかさがまるでちがう。そこの家の屋上付近、一人の人人がいる……………

「…………いや、永琳よ。あの森は危険だ。考えなおすことになります」「父様、私は決めています。考えを変えるつもりはありません」むう……………

一人は永琳と呼ばれた少女。しかし、髪の毛の色は銀にちかい色をしている。もう一人は永琳と呼ばれた少女が父様とよんだので、おそらく二人は親子なのだろう

「しかし…………私の可愛い永琳が妖怪に傷を付けられたらと思うと……」

「だいじょうぶです。エリート部隊の方々も一緒にですよ?」

「しかし所詮は男……ハツ！？まさか永琳！？エリート部隊のなかに好きな人が……お父さん許さないぞおおおおおおお！？どこの馬の骨おも分からぬ奴にいいいいいい！？！？」

「ちょ！？／＼父様そんな人いませんよ？！」

どうやら父親らしき人は大事な娘に悪い虫が付かないか心配なご様子。しかし永琳という少女は顔を真っ赤にし、手をブンブン振つて否定。なんとも和む仕草

「…………俺たちいつ話しかければ？」「「「「「さあ？…………」」」」」

エリート部隊は話しかけるタイミングが分からなくて困っていたそ
うな

第2話 天才が動き出す……（後書き）

えーりん！えーりん！ろーりん！

やべえ妄想の中で幼くなつた永琳が顔まつたで手ブンブン振る姿思
い浮かべたら……「ふつ。

あ。感想、意見、批評などありましたら気軽にビーツや！

それではまた次回に……

第3話 人と大木、そして妖怪（前書き）

あつはつはつはつはつは
やけにハイテンポだよなあ　ｗｗ
……反動が怖い

第3話 人と大木、そして妖怪

「んっん／＼＼＼＼＼……ではエリート部隊のみなさん。田標はあるの大木です！強い妖怪などが多いと思われます。気を引き締めて行動しましょう！」

「…………了解しましたーー！」

しばらく経つて永琳がエリート部隊に指示をだした。はたからみるとかっこいいものだが……さきほどの親子の会話を聞いていたエリート部隊の隊員は皆心で「（（（締まらねえ）））」「」と思っていた。ちなみに父親は隅っこで「私の可愛い永琳が私の可愛い永琳が私の（「」）と連呼していた

閻
話

あまりにも恥ずかしかつたのか永琳は武器の弓で父親の頭を狙つていた……エリート部隊のおかげで実行はされなかつたようだが

そんなこんなでヘリ（輸送用重装甲の）に乗り込み森に出発した永琳たち 父親は泣き崩れていたそうな

・・・・永琳一行移動中・・・・

「……あれが、今回の目的地ですか」

移動してから約1時間、ようやく実際にみることが出来た森は広大なところだった

「永琳殿は実際に見たことがあるのでは？」

「いいえ、実際に見たのは初めてだわ。こんなに広いなんて思わなかつたけれど……」

永琳はそう言って一回森を見、

「大木があんなに大きなものだと思わなかつたわ。まさか都市のビルよりも大きいなんてね」

そう言つて問題の大木を仰ぎ見た

そこに存在していたのはまさに大木。長い年月を経て少しづつ成長していつた木。ただの大きな木のはずなのに、なぜか神々しさも供えた大木だった

「まさか穢れさえもないなんて……」

「つー？穢れがないのですか！？そんな……都市以外の場所は穢れ
ていると——あなた（永琳）さまの調べで……」

「まさに予想外です。……しかし、これはどうやって穢れを？」

永琳は考える。『』の守護者とやらが穢れをなくしているのか……
あるいは……

しかし、永琳の考えは纏まらなかつた。それは

「ん……？なんだ……つー？報告します……」

「なんだ！？いつたいどうしたんだ？」

突然、エリート部隊のヘリの外を警戒していた兵士が焦つたような
声を上げたからだ

「困まれました！——妖怪の大群です！——数は……おそらく一〇〇以
上いる模様！」

「なんだつてんだ？急に現れやがつて……さつきまではレーダーに
何の反応もなかつたぞ？」

「分かりませんが、『』ちらに明確な敵意を感じ……攻撃来ます！搖
れますよ！——」

妖怪たちは突然現れ、ヘリを落とすと攻撃を仕掛けてきた。しか

し普通ならば回避行動はする必要はない。このヘリは重装甲だからだ、しかし

「つ…まさかあいつらの中に？」

「永琳殿？」

「気をつけて！！妖怪の中に能力持ちがいるわ！！」

「そんな馬鹿な！？畜生、ついてないっ！」

能力、それは稀に人や妖怪などが持っている力。その力はさまざま個人で能力が違う。

その力は強大で、ピンからキリまである

「ヘリの操縦桿の近くの青いスイッチを押して！」

「青い……これですね？！押します！…」

瞬時に永琳が指示をだす。ヘリのパイロットはすぐに探して青いスイッチを押した

-緊急事態！敵二能力者アリ！！シールドヲ展開シタノチ、能力ノ解析を開始シマス -

スイッチを押すとヘリのAIが音声を出し、説明しながらシールドを開く。展開した瞬間にヘリに強い揺れが生じる

「永琳殿！！今のスイッチは？」

「緊急の装置よ、敵に能力者がいた場合、ある程度のダメージを軽減するシールドを展開、敵の攻撃を観察、能力の特定をするの」

- 特定中・・・・・サーバー接続、検索力イシ -

「大体3分で特定できると思うわ。それまで操縦はオートじゃなくてマニュアルになるから……パイロットさん!」

「そういうことなら了解です! 3分持たせますよ!」

会話の途中にも攻撃は続けていた

第3話 人と大木、そして妖怪（後書き）

やばくね？東方じゃないや……

次回で大木に到着……する予定です

では次回までお楽しみに……していただけるとうれしいです

第4話 抗戦中（前書き）

遅くなつましたーではじめられーー。

第4話 抗戦中

永琳が能力解析を指示したあと、妖怪たちの攻撃は激しくなつていつた。

「くつそ！ 妖怪の癖に……」

「妖怪はやはり危険だな……こちらも少しずつ応戦しよう。既、武器を構えろ……！」

「……了解です……」「……」

妖怪のなかでも、やはり能力を持つていて思われる1匹は知能も高いのか、無能力の妖怪に指示を出して自分に近づけないようにしている。すでにヘリは何度も被弾している。しかし、まだ落ちていないのは永琳の作ったシールドとパイロットがあつてのものだった

「……検索中、検索中。スキヤン……不一致。スキヤン……」

「まだですか？！ 永琳殿！」

「あと少しのはず……もうすぐ終わるわ」

「聞いたか？ あと少し耐えるんだ……！」

「……」「了解」「……」

耐える、といつても所詮限度がある。銃火器の弾薬もどんどん無くなつていいく。そして

「うわあ！？ たつ！ 助けて～」

ヘリの不規則な動きで落下していく隊員や

「がつー！」の野郎……一ツ腕が食われた……」

妖怪に体を食われたりする隊員がでてくる

最初は30人いた隊員はいまや16人程度に。妖怪たちの攻撃によりどんどん疲弊してきている

「こままでは……おいつ！まだロケットランチャーはあるか？！」

「あと3発です！！」

「あの固まっているところに打ち込め！」

「了解！……このつ！くたばれ妖怪どもめえええ！！」

-スキヤン完了。能力ノ候補3件。有力ナノハ恐ラク『物を発射する程度の能力』だとおもわれる -

ようやくスキヤンが完了した。しかし分かつ敵の能力『物を発射する程度の能力』はとても応用が効く能力だった。たとえば辺りに落ちている小さな石や木片など一見危険な要素は見当たらない物も、速度が付いた状態では危険なものに変わる。

「なんて能力だ……厄介だな」

「しかし、結局敵の能力が分かつただけじゃなにも意味はないですよ！？」

「うーむ……永琳殿。如何したほうがよろしいでしょうか？」

隊員達はだんだん焦つてきていた。いま残った人数は6人程度、とても妖怪達に勝てるとは思えない。そこで、天才の永琳の知恵を借りようとする

「なんてこと無いわ。」この機体をあの巨木に突っ込ませればいいわ
「なつ！？なぜですか？それじゃ全滅しますよ？」

「いいえ大丈夫。」このシールドはまだ持つし……あの巨木には妖怪達が近づいていないことに気づいているかしら？」

そういつて目を巨木に向ける。隊員たちも見ると

「本当だ……でも何でだ？あいつらが近づけない理由は？」

「恐らく神聖なものだからではないでしょうか？妖怪達は穢れが固まつた存在。あそこまで綺麗だと浄化されてしまつのでしよう」

永琳はやつ言いながら機材を操作している。時々「きっとあの巨木の中に……」「でも……まさか？」などと言つていた

「隊長……どうしますか？」

「…………永琳殿の意見に賛成だ。すぐに行動するぞ！」

「「「了解です！－」」

いま、巨木への突撃作戦を開始しようとしていた……

第4話 抗戦中（後書き）

「ミケ……行きたかった……！」
秋風様の見たかった……（悔

第5話 田畠の地に突撃……（前書き）

遅くなりましたあ！

今日はカラオケではつちやけました。喉痛い。
どうでもいいことですね。

七代白猫様に感想を頂きました。ありがとうございます！

ではどーぞ

第5話　目的の地に突撃……

「進路変更！あの大木までだ！」

「了解！シールド全開で突貫します。ハッチを閉めて衝撃に備えてください」

永琳が指示してからの行動は早かつた。即座に周りの妖怪達にレーザー銃を照射、粗方片づけた後にハッチをしめる

「ああ、そこの青いボタンを押してください。加速します」

「こんなものも……さすがは『天才』ですね」

「天才……か……（ボソッ）」

・瞬間加速ヲ承認。コレヨリ加速シマス・

加速した機体は早かつた。機体のあちこちにブースターが展開、前方の妖怪を挽肉にしながら更に加速する。

「くつ……一制御しずらいっ！」

「緊急用よ。大丈夫、一応は機械がサポートするわ」

加速してから十秒。妖怪を何体もひいた後、能力持ちであると思われるリーダー格が見える。そいつは岩石……それもかなりの大きさの物を射出しようと躍起になっていた

「あんなの当たつたら機体が保たないぞ！？」

「心配ないわ。だつて……」

そう永琳が言つた直後、岩石が発射される。が、機体に当たつた瞬

間にその進路を変える。そう、能力持ちの妖怪の元に

「……一体何が？」

「簡単なことよ。最大出力時のシールドには反転作用があるので」

「さあもつすぐに着くわ」

第5話 田畠の地に突撃……（後書き）

「あの木大……目的地にね」

— 続く —

とにかくなん感じに。反転は某禁書田録の彼をイメージして下さい。短くじめんなさい

第6話（前書き）

「注意！前方に障害物アリ！注意！前方に障害物アリ！……」

「つるさいわね……ポチッと」

「永琳殿、衝撃に備えてください。全員！衝撃がくるぞ！」

妖怪をミンチにした後、ヘリは真っ直ぐに大木に突撃していく。

「あの大木は中空洞になっているみたいだから、衝突する前にヘリに付いてるレーザーキヤノンを撃つて」

「了解、レーザーキヤノン準備します」

「目標トノ距離ハ後100メートルデス……」

「レーザーを撃つて！」

「了解。発射ア！！」

永琳の指示したレーザーキヤノンはこのヘリ、ガーボイルの主武装。高エネルギーで消滅させるスグれものである。

「大木に穴が空きました！」

「その穴に入つて。中を捜索しましょう」

第6話

大木の中には広い空間があった。所狭しと並べてある何かの計器、まるで工場だった。

「こんな物が……」

「都市でもこんなに高度な物はないわ……いつたい？」

「永琳殿！これを！」

隊長が永琳に渡したもの、それは

「銃ね。実弾……いや、エネルギー銃？」

「こちらにはエネルギーの剣でしょうか？様々な武器の設計図ですかね？」

床に広がる紙、紙、紙。設計図や計画書、報告書などが散らばっている。

「……project ZERO? いつたい何のことかじりね」「すごい技術ですね。都市の誰かがやつたのでしょうか？」

永琳が手にしたのはとある報告書。プロジェクトゼロ計画と書かれたモノには人体の明確なデータがとられているようだ

「いえ、これは昔のものね。計器が錆びていたりするわ

「……よく見ておりますな」

永琳が言つた通りに、計器などの端は少し錆びている。都市では錆などは無い

「これ……微かに読める?……『コノ計画…失…破壊神ハ…
制…フノウ』?掠れてて読めないわね」
「永琳殿、奥に続く通路がありました!」
「分かつたわ。いつてみましょう」

イレギュラーとの接触は近い……

第6話（後書き）

いやあ…主人公全然でてないね。

次回でたらしいのになー

第7話（前書き）

カツン…カツン…。

奥の通路はトンネルの様に薄暗く、長いものだつた。

「長いわね…奥まではどのくらいなのかしら?」

「分かりません。しかし、弾が切れた銃も役に立つのですね」

薄暗い場所はさすがに氣味が悪いので、ライト付きのハンドガン（弾切れ）で進行方向を照らしている。

カツン…カツン…。ただ永琳達の足音が響く。当たり前だ、此処には永琳達しかいない筈なのだから…。だが

「…………今何か聞こえなかつた?」

「??いえ、私達には何も…永琳殿はなにか?」

永琳の耳に届いた物はあるで…

「うめき声のような…なにかが」

「…隊員、周囲を警戒せよ」「了解…」

隊長の指示に、隊員達は永琳を囲むように隊列フォーメイション・マジンジ。まだ弾の残つている銃を構え、警戒する

「…………お主等、何をしにきたんだ?」

「つづ…?誰ツ!」

急に近くで聞こえた声。一同はすぐさまそちらを向く。無論、銃を

構えながら

- ああ、すまなんだ。ビックリさせたか？ -

「 露がしゃべつている？」

乳白色の露がフヨフヨと浮きながら語りかけていた

- 私はギレミー。ただのしがない研究者…だった者だ -

露はギレミーと名乗った。

第7話

「…つまり、昔此処で働いていた人ってこと?」

「そう。此処は違法研究所、人の身体を改造、その後兵器として使用する事でコスト削減しようとしていた」

「人体改造…? そんな技術は廃止した筈よ」

「何? ……今は何年だ?」

「え? 今は××××年よ?」

「…なるほど、ここには私のいた時代ではない時間移動したのか。いやしかし?」

「つまり? ギレミーは違う時間から此処は来たのね。まあそれは置いておいて、奥には何がいるの?」

ギレミーと名乗った者は時間移動したといった。理由は分からないらしいが、永琳が聞きたいのは大木にいふと言われている守護者についてだ。

「お主等は奥に行くつもりか?」

「ええ。そのつも「やめておけ!」え?」

ギレミーは急に威圧感を出しながら言った。

「…どうゆう事なの?」

「…アレ(・・)は人間が制御できるモノではない。手を出してはいけなかつたのだ」

ギレミーは日に後悔の念を浮かべながら言った

「アレとは?」

- 試作品427番、タイプ【破壊神・守護者】。コードネーム『ZERO-ZERO』 私達が生み出してしまった悪魔の兵器だ -

第7話（後書き）

うん。やつちまつたあ。名前も出たつけ？主人公？

あ、ギレミーは一発キャラだよ（笑）あれだ、RPG序盤の説明キャラです。哀れ……

第8話（前書き）

「永琳殿、ギレミーと名乗った奴の言った事…本当にどうが？」

ギレミーと名乗った靄はある後に『時間、ガナイ……アイツを破壊シナケレバ……』と言った後、消えていった。隊長はギレミーの言つた事を信じてはいなかつた。

「恐らく本心ね、実体があれば眼を見れば分かるのだけど」

「……本当ならば恐ろしいモノです。守護者はともかく破壊神は…」

「人工知能に異常があるのではないかしら？守護対象以外は壊せ、なんて考えを持っているとか」

永琳達の目標は大木に居ると思われる守護者の確認。これを発見したら早く撤退するべき…と永琳は考えていた。

「（出来たらデータも取りたいけど…今回は無理そうね）

「永琳様！この先の部屋に熱源があります。」

天才と機械仕掛けの守護神は今、出合つた。

第8話

「フォン… フォン…」

その部屋にはさまざまな機械が設置されていた。その中心、何かの液体で満たされた容器の中にソイツはいた。

「これが……ZERO・ゼロ・破壊神？まだ少年じゃないか！？」
「酷い……」こんなに小さな子供を実験台にしたのか？！」

容器の中に浮いていたのはまだ若い少年だった。その四肢は所々に機械が露出し、心臓の在るべき所にコアと思われる黒い結晶がある。髪は吸い込まれそうなほど黒髪が長く伸びている。そして、機械の作業をしているのが

「人形？… いえ、機械人形かしら？」

「機械！？アレがですか？！」

そう、機械人形だった。少年より少し成長した女、思わず人と間違えるような見事なものだった

「機械人形ではなく、正確にはレプリロイドです。」「意志疎通は出来るようね？」「はい、私は【万能型】のレプリロイドです。言語も修得済みなので会話もばっちりです」

機械人形では無くレプリロイド、と言った少女はそう言って微笑んだ

第8話（後書き）

最近東方のサークル、アールグレイのラジオを聞いてニヤニヤしています。文可愛いよ！

WINDY FLOWER～風に咲く花～ の off vocal 版を作業用BGMにしています。え？ビーでもいい？……聞いて見てはいかが？

第9話（前書き）

「あれ？人間様は私達の事知らないんですか？」

「この世界にレプリロイドはいない…少なくとも私達は知らないわ」「そうでしたか…あー申し遅れました、私はアイリといいます」

アイリと名乗ったレプリロイドは作業をしながら受け答えしていた。永琳達はアイリの邪魔をしない程度に付いていくつて質問などをした。

「それにしても貴方は随分と表情豊かね」

「私が特別…とゆう訳ではありませんよ？レプリロイドには「心」があります。人と共にをコンセプトにしたものですからね」

「心！？…本当に優れた科学ね」

「私はあの子…ゼロが目覚めたら母、あるいは姉として接するように特に愛情という感情に力をいれたそうです」

アイリは優しい表情でゼロの容器を撫でた

「良い言葉が浮かびませんが……ずっとこの子と過ごしてきましたが、毎日が楽しかったですよ？この子は田覓めたくない様ですがね」

アイリは困ったような顔でそう言った

「田覓めたくない？分かるのですか？」

「はい、ゼロの容器に触れてみて下さい。」

永琳が容器に触ると

『……誰？俺に触るのは？』

「声が頭に響く？！」

「テレパシーの様なものですかね？意志が分かるのですよ」

第9話

永琳はいきなり声が響いたので少しうつくりしたが、すぐに戻り声に耳を傾けた

『アナタは誰？』
「私は永琳よ」
『何故ここに来た？』
「此処を調べる為」
『……俺が狙いか？』

ゼロはその外見よりも成熟していた。相手の行動などを分析して先読みをするほどに

・緊急事態発生！研究エリアに何かが進入！繰り返す、緊急事態発生！…

「これは？私達の事かしら？」
「いいえ、違います…人間以外の存在が来たようです。Aからロブロツクまでの特殊シールドを開設。進入者を拒め」

アイリは空中に浮いた端末を操作しながら言った。

「一ツツ！？しまった！妖怪だ」
「？？妖怪は存在しないのでは？」
「この世界はアナタ達がいた世界じゃないの、妖怪は存在している

永琳はすぐさま周囲を見回し脱出できそうな所を探す。いま妖怪に対抗できる武器は持ち合わせていない

「えつ！？特殊シールドが破壊されている？…そんな馬鹿な事…」

「妖怪は強いわ、卑怯な程ね」

「…ABCブロック突破、もうすぐ此処に来ます」

「永琳殿、残った兵器では妖怪を殺しきれるか…」

そう隊長が言った瞬間だった。

ミーツけたア……人間メえ。もう逃がさないゼエ！

第9話（後書き）

こんな所で切る訳は…あまりないつ！

【発熱巫女～す】 【Coda】君の夢…いい曲だなア（ううとう

第10話（前書き）

いつからだろうか、知らない知識が頭に浮かんできたのは。いつからだろうか、自分死ぬ所を妙に鮮明に見た事は。

初めて感じたものは悪意に近い他人の感情だった。オレに対して狂気に似た関心を持ったアイツは最初に言った。

『おお…………ついにワタシはやつた！過去のエイコウ、守護神を眠りから覚ませたのだあ！』

と。エイコウ？過去の？オレはいったい何なのだ？…分からなかつた…

幾日も幾日も狂った様な研究者達に見られていた。いや、躯を造る為に観察していたのだろうが。とにかくねつとりとした気持ち悪い視線を感じる毎日。

そんな毎日は突然終わりを告げた。

ある時、一人の時間に頭にとある言葉が浮かんだ

『殺氣を扱う程度の能力』

殺氣？？たしか殺す時に出る気配…だつたか？

頭の知識を漁つてみたがあまり役に立つ物は無かった。だけど何故か、使い方は分かつっていた。

『なつ…何なんだコレは？！コイツが出しているのか…？』

ある時に殺氣とやらを出してみた。どうやら一種の威圧感の様な物を出せるらしい。研究者達は脂汗を出しながら後ずさっていた。

第10話

ザワツ……

大気が震える。まるで恐怖する様に

「なに……？」 「震えが止まらない……怖い」

突然の威圧感。それはその場に居た全員を震えあがらせた。自分の首に死神が大鎌を当てていて、今にも首を焼き斬ろうとしている様な

何なんダア？！コレは一体なんだあ！

目の前の妖怪も例外ではなく、驚愕^{ハラハラ}に田を見開いている。
今まで妖怪としてニンゲンを何人も殺して恐怖させてきたソイツは、自分より強い相手に出会った事が無かった。それ故に初めての感覚に戸惑い、体が硬直してしまっていた。

「ゼロ……アナタがコレを？」

そんな時だからだろう。アイリがポツリと呟いた言葉が大きく聞こえた。

ークスツ、クスクスクス……

聞いた者が恐怖する笑い声。小さく愉しそうに笑うゼロの田は紅く輝いていた

第10話（後書き）

書き方変えました！読みやすくなるといいなと思います。

そしてこの作品のOPを何故か決めました！GacktのRED E MPTIONです。はい。ファイナルファンタジー ダージュ オブ ケルベロス のEDですね。

誤字、脱字ないと想いたいですが、有つたらご報告いただけます。

ではまた次回

第1-1話（前書き）

一パンシペシペシ

容器に蜘蛛の巣状に走る鱗。ゼロの殺氣の余波に耐えきれなかつた
よつだ

「嘘……特殊ガラスが碎ける……」

鱗はどんどん広がっていく。そして……

歓喜せヨー！破壊神ノフツカツダーーー！

ー形を保てずに壊れる。

粉々に砕けたガラスがキラキラと降り注ぐ。その中でゼロの紅い眼
が妖しくガラスに光を反射させる。

「綺麗……」「おお……」「えっと……おはよつゼローーー」
「…………あ、ー、う、ん、ツ……おはよつ、よひじへー

第1-1話

「……なんか、喋るのって難しいね。言葉を選択した後、声帯で音を出す…のかな？」

ゼロはそう言ってから妖怪の方を見る

「……ねえ、コイツはどうすれば？」

妖怪は殺気によつて動けないようだが、敵意むき出しで喚いている。
貴様ア！ とか 人間ノ癖ニ！ とか

「永琳さん……だっけ？ 判断よろしく

「……サンプル？ いえ、殺しましょ。多くの仲間がやられました
し」

「了解！ ……と言いたいけど、俺丸腰なんだけど」

ゼロはとりあえず、周りを見回した。しかし田舎じこものは無かつた為

「とにかく殴る…殴るッ！」

ガフ！ ? オボエー！ ? アガアツー！ ?

「――（うわあ……）」「」

とにかく殴る」としたらしい。少年が倍以上の体型のヤツをボコボコにする光景は……なんといつか、うん。

第11話（後書き）

何故か前書き部分が長いような？… 気のせいか！

Side 永琳

「なにもしないわ！ ツッてかなんなんだ！ ？お前はイキナリぶん殴つてきやがつて！ ？」

「... ハア。どうやら上ぬがしかしい。...」

わいよね……どうしていつなつたのか、一回思い返してみましょーか……

あの後、ゼロが妖怪をボコボコに殴り続け、アイリが慌ててそれを止めて、ゼロが正気に戻した後：

「あら？おかしいなあ？お父さんとゼロが会った瞬間にお父さんが殴りかかつた？…」

「貴様なんかが……俺の田に入れても痛くない永琳を誑かしたんだあ
あああああ……」

「ぐつー……お前一ソングンなのか?! 田どんだけテカイんだよ?」

「例えだあああああああーあ、俺はやううと思えばできるだ?」

ああなつた。

「……隊長、俺ヤメテいいですかね?」

「……俺もやめようかなー……」

「……『めんなさいね』あんなのが此処のトップだなんて信じたくないでしょ! でも…………これって現実なのよ」

「永琳殿、苦労したんですね……」

「いい加減にしないと」コレ(『矢』)その頭に撃つわ

「いい加減にしないと」コレ(『矢』)その頭に撃つわ

「「すいませんでした。それだけは勘弁して下せー」

後に隊員は語った。素晴らしいまでのジャンピング王下座だったと。

第1-2話（後書き）

短くて本当にすみません……なんかやる気が……

「甘いッ……もつと良く狙え！」

「ツー 了解！」

爆音と閃光の後にバストー！と的に銃弾が当たる音がする。

「ここは都市のある暗殺者の家の射撃訓練室。ゼロともう一人、そちらへんに居そうな顔を持つ男性がいた。

「よし、今日はここまで！ 体の緊張を解いていいよ？」

「あ、～！～終わったあ～」

ゼロは終了の合図で崩れ落ちる。ビリヤーからかなりハードな訓練だったようで、全身に汗を搔いている。

「それにしても…なんで君はちゃんと弾丸を曲げられないんだろうね？」

「弾丸が曲がるわけないでしょ…」

この男性、名前を上杉 戯武遜(アキラソン)と書く。この都市で最強の名を持っている『暗殺者』である。

あの永琳の父親との見事なシンクロ土下座の後、ゼロは永琳に「銃の扱いを教えて貰える人がいたら紹介してくれないか?」といった

のである。理由はゼロの武装の一いつに【銃】があつたからだつた。オリジナルはあらゆる武装を使いこなしていたそなだが、経験は流石に覚えさせられないでの、戦いについては素人当然だつたのだ。主な戦い方は『接近して殴る。』コレだけだと高位妖怪達に太刀打ちできないどころか瞬殺だろつ。

永琳は自分の持つ情報網などを駆使して、都市のありとあらゆる銃使いに頼んでいた。結局受けてくれたのは戯武遜だけだつた。

「しかしねえ……アンタ本当に人間か？ 銃弾を曲げるなんて人間技じゃないぞ？」

「え？ 家は『弾丸は曲がるものだ』つていうけど……」

「一家揃つて非常識なのか？ あれ？ 倘間違つてる？」

「これはこの一家だけのものです。普通決して弾丸は曲がりません。

「ふむ……そろそろ能力の訓練の時間じゃないか？」

「え？ あ、本当だ！ ……逝きたくないなあ（遠い目）」

「あはは……がんばって」

「ゼロは駄々をこねた！」

「戯武遜は困り果てている……」

- ! - 突然室内の温度が10 下がった（気がした） -
- ゼロは震えている（恐怖的な意味で） -
- 部屋の隅に女性が現れた！ -
- ゼロは逃走した！ … … 駄目だ… 恐怖の対象からは逃げられない！ -
- 謎の女性はゼロに歩み寄ってくる（ゆっくりと）やしない……
- ゼロは死んでしまった「ふざけんなー死んじやいないー…」めんなさい…その手刀を下ろしてトセーお願いし三（パスウ…！…！

「ああ、訓練の時間ですよ」

「…分かってはいたわ、逃げられなってね…（泣」

第1-3話（後書き）

すみません。すつっつっつっじく遅れました。理由は……これでも一応受験生なんです。はい。言い訳ですね、笑ってくださいな

さて、上杉はあるキャラクターを元にしておりますが…気づく人おるんか？ まあいいや

これからもちょくちょく更新していくます。永久凍結はしません（

断言

第1-4話（前書き）

短いけどいいよねーこれが作者の（今の）限界だもの！

前回のあらすじ

・俺：もう死ぬかもね（笑）

「つて（笑）じゃない！！冗談抜きで死んじゃうからーー！誰か…誰か助けた」「つるさい、黙れ」ハイシショウ…」

さて、この日の前で仁王立ちしている鬼「誰が鬼だ馬鹿者ー（ゴスウーーー！」…美しい女性の紹介をしなくては。

この人は祈さん。身長160?の小柄な女性だ。…だけど、こんなナリでも17歳。

祈さんは永琳さんの配下…というよりもメイド（家政婦）さん。しかし侮るながれ、妖怪を柄の付いた雑巾（モップのこと・さら）に無改造のただのモップ）でぶつ殺すスーパー・メイドなのだ！

「さて…神様にガタガタ助けを求める時間は終わったか？」

「あれ！？祈さんって神様信じてましたか？」

「え？神様って私でしょ？」

「え？」

「あ、あ、ー？」

「はい、いいいい！祈様は神様です！」

「...」のよつに、自分=神 な人。たぶん神様もふちのめす事ができるだつ。

「.....さて、くだらないやり取りはもうやめてだな」

「ー？ あの...お、お手柔らかに...？」

ゼロはガタガタ震えながら少し引きつった笑いでお願いするが

「ん？ それじゃあ訓練にならないだろ」(ニタア...)

悪魔の嗤いで却下された。

え！？ ちょ... 祈さんそこはそつちに曲がらないで...
ギ

ヤアア 鳴呼アアアアアツア 鳴呼

「ふふ、やっぽりゼロの必死な顔って素敵だわぁ（うひうひ）」

「…………（返事つてか氣絶してゐる。どうやら力尽きたようだ）」

ゼロが起きたのはもう時間後で、祈る間に腹を強く踏まれたからだった。
△掌。

第1~4話（後書き）

祈さんはフツツと思い浮かんだ。永琳のメイドっぽいたぶんこの時点で最強の一人。上杉も同じく。

さて…名前で氣づく人はいるのであらうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6745v/>

東方死神記

2011年12月16日17時55分発行